


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2019年7月


博士学位申請論文審査報告書

論文題目：「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした
日本語教育
—フランスの日本語専攻学生の移動性に注目して—

申請者氏名：山内 薫

主査 蒲谷 宏 署名 蒲谷 宏 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 川上 郁雄 署名 川上 郁雄 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 池上 摩希子 署名 池上 摩希子 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

<本論文の概要>

本論文における研究目的は、日本語学習が将来において「使うあてのない外国語学習」となる可能性が高い状況にいる日本語専攻学生（在籍生、修了生・中退及び転科者）に対する「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化を目指した日本語教育とはどのようなものかを提言することにある。

本論文では、フランスの日本語専攻学生の「移動性」に注目し、「日本語学習と人生のつながり」からみる学習実態に基づき、「ことば」の学びに寄り添う日本語教育とはどのような教育かを論じるために、次の三つの問いを立てている。

1. 日本語専攻学生の大学での日本語学習経験は、どのように個々人の人生とつながっているのか。
2. 日本語専攻学生は、フランスの国立大学の学習環境において、どのように日本語を学んでいるのか。
3. 日本語専攻学生が、大学時代及び大学という学習環境で、外国語としての日本語を学ぶ意義とは何か。

本論文は、全8章により構成されている。各章の概要は、以下のようになる。

第1章では、まず、フランスの国立大学日本学科の教育を再考する上で、日本語を学ぶ当事者である日本語専攻学生の視点が組み込まれていなかったこと、将来において「使うあてのない外国語学習」としての日本語を主専攻として学ぶ学生に対して、言語的道具としての「ことば」の獲得に価値が置かれる日本語学習を行うことにより「日本語専攻学生の日本語学習」＝日本語専攻学生が「成功者」となることと意味づけられてきたことなどについて批判的に論じている。そして、「ことば」を学ぶことにおける本研究の基本的な視点として「生きる活動」及び「移動性」という二つの視点を示すとともに、言語学習が「学校教育を越え、生涯にわたり継続的に営まれる行為」ではなく、「生涯にわたり、時間的・空間的視点から、一人ひとりの生活やそのなかの移動性を踏まえた上で営まれる行為」であるという、従来の生涯教育の概念とは異なる考え方を提示している。その上で、本論文においては、生涯教育論、および「移動とことば」研究のバイフォーカル (bifocal) なアプローチの概念を枠組みとし、本研究の問題意識に適する質的研究法を用いること、さらに、フランスの日本語教育における先行研究を概観し、本論文の意義を示している。

第2章では、「学習と人生のつながり」がどのように捉えられてきたのかということ、学習と人生のつながり、および外国語学習と人生のつながりから概観し、本研究の位置づけについて述べている。

第3章では、日本語専攻学生が置かれている日本語学習環境について、日本への関心とフランスの大学教育政策からみる日本語学習の開始、フランスの大学の大学の大衆化からみる日本語学習の継続、および、フランスの言語教育政策における理念と日本語教育実践の観点から述べている。

第4章では、「[研究1] 人生と日本語授業」として、フランスの国立大学の学士課程日本学科で、主専攻として日本語学習を経験する在籍生が大学の日本語授業をどのように位置づけているのか、また大学での日本語学習と人生をどのように関わらせているのか、という観点から日本語ポートフォリオを分析している。

第5章では、「[研究2] 生活と日本語学習」として、在籍生3名を対象とするインタビューを通し、垂直的視点（時間）及び水平的視点（空間）からみた移動性という観点により、大学内外の日本語学習の実態を追究する。具体的には、日本語学習体験と日本語学習に関わる多様な学習体験がどのように連繋し、どのように独自の日本語学習を構成しているかを把握し、その上で「日本語学習と人生のつながり」のプロセスを考察している。

第6章では、「[研究3] 「移動」と日本語学習」として、日本語学習に関わる移動性をより詳細に記述するため、日本語専攻学生の範囲を修了生・中退及び転科者に拡げ、質問紙調査及びインタビュー調査を行った。3名への調査を通して、垂直的視点（時間）及び水平的視点（空間）から日本語学習に関わる「移動」の軌跡を追い、さらに、どのような変容のプロセスを経て、それら二つの視点における「移動」が統合されているのかを追究し、「移動」とことばの関係性を考察している。

第7章では、実態調査の総合考察を行っている。さらに、第2章から第6章までの議論と調査を踏まえ、「学習と人生のつながり」からみる日本語専攻学生の学び、そして、日本語専攻学生が外国語としての日本語を学ぶ意義を考察する。

第8章では、日本語専攻学生の「日本語学習と人生のつながり」からみる学習実態に基づき、日本語専攻学生に対する教育を問い直し、「ことば」の学びに寄り添う日本語教育の構築に向け、「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化を目指した日本語教育を構築する視座について論じている。

<本論文の評価>

評価できる点は、以下のとおりである。

(1) 本論文は、海外の大学における日本語専攻学生（在籍者、修了生、中退・転科者含む）にとって、日本語学習はどのような意味があるのか、そして日本語教育の意義は何かを探究した論文であるが、その研究主題に取り組むこと自体に意義がある。

(2) 日本語学習者の視点、あるいは学習者の人生の視点から考察した点。例えば、海外の大学、本論文ではフランスの大学における日本語教育のこれまでの研究や教育実践は、大学側あるいは教師側の視点からのカリキュラム設定や管理や運営であったが、本論文の、学習者の視点あるいは学習者の人生の視点から、大学における日本語学習あるいは日本語教育の意義を考察した点は、これまでになかった試みである。

(3) 考察の中で「学習と人生のつながり」に注目し、それを「軸」と捉え、学習者の移動性をもとに研究を行った点は、独自の視点である。

(4) 分析結果として、移動性のある学習者のライフサイクルの中で、日本語学習、他者との関わり、言語学習環境の捉え方などが変容していき、その結果、その人自身の「学習と人生のつながり」の軸が形成されていくと論じた点は、新しく、ユニークな考察結果だと認められる。

(5) 「学習と人生のつながり」の軸を形成する言語教育、日本語教育の構築が必要であり、それが生涯における学びのコアになる。また、大学における日本語学習の阻害要因と考えられてきたものは、必ずしも阻害要因になることはなく、むしろ「学習と人生のつながり」の軸を形成する教育あるいは意識化する教育が必要である、という主張も、独自の新しいものだと言える。

(6) 日本語を学習しても、それが「使うあてのない外国語学習」となる可能性が高いと予想される環境で日本語を学ぶ意味と意義を問い直そうと試みていることは、評価できる。また、研究主題として意義のあるものである。さらに、これまでの先行研究にはなかった視点、つまり学習者自身の視点を主題を探究する過程に組み込んでいく点も、評価に値すると言える。研究の課題と研究手法との親和性もあり、丁寧な記述と分析も見られる。質的なアプローチによる論考として成立している。

(7) 本論文は、日本語学習の具体的な意義が明確だとは言えない学習者に対する、言語教育／学習の本質的な意義を見出そうとする強い志を示したものであると言える。そのための具体的な教育実践のあり方も追究しているが、この論文の真価は、教育／学習のあり方そのものへの提言にあるのだと言えよう。その点での重要性は、高く評価されるべきものである。

問題点・課題は、以下のとおりである。

(1) 研究から導き出された結論を事例（フランスの日本語専攻学生）に戻して論じているが、その後、より広い視野をもって提言や示唆を行う必要があるのではないか。すなわち、ここでいう「使えるあてのない外国語」の学習や教育は、フランスの大学の外国語専門コースだけで行われているものではない。今後の課題として触れられてはいるが、さらに具体的な記述もできるのではないか。例えば、日本の大学の第二外国語学習・教育といった文脈ではどうか、こうした考察も求められるのではないか。

(2) 同様に、結論から「授業実践」の転換について述べられていて、そこでは「懇談」という考え方と手法について、説明がある。そして「授業活動」に対する提言へと続くが、「懇談」にしても授業活動の具体例にしても、より丁寧で厚い記述がないと、既にいろいろな教育実践の現場で試みられている内容との違いが伝わらないのではないか。

(3) 「ことばの学びに寄り添う日本語教育」と『学習と人生のつながりの軸』の形成と意識化をめざした日本語教育」はイコールの関係である、ということであった。研究目的として、前者を明らかにすることが示されているが、前者がどこから出てきたものなのかは、必ずしも明らかにはならなかった。

(4) 本研究の重要な視点は、移動性である。垂直的視点、水平的視点があるが、言語間の移動に関しては十分な考察がない。上記の軸を形成する上で、言語間の移動は大きな要素となる。

(5) 時間的・空間的に「移動」しながら「学習と人生のつながりの軸」を形成、意識化する、したがって「軸」は変容しないと述べている。それは、大学生という比較的短い期間を対象とした説明であるが、「人生」となれば、その「軸」の変容も考えられよう。その時、日本語教育の意味はどうなるのか、今後の継続的な研究が期待される。

<本論文の判定>

上に述べたような問題点や課題はあるものの、本論文における主張、提言は、日本語教育学において大変意義のあるものであり、博士（日本語教育学）の学位を授与するに値する論文であると認められる。

なお、本論文にあった誤記等は、添付の「日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト」のとおり修正されたことを確認した。

博士學位申請論文 題目	「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした日本語教育—フランスの日本語専攻学生の移動性に注目して—	
申請者	山内 薫	
修正リスト提出日	2019年8月5日	
ページ番号・行	修正前	修正後
本冊		
p. 13・下 10 行目	教育課程 (p. 13 の修正すべき箇所 に合わせ、p. 14 の 2 箇所も同様に、 計 3 箇所を修正した。)	教育過程
p. 14・下 11 行目		
p. 14・下 3 行目		
p. 22・下 10 行目	データを収集される	データが収集される
p. 27・9 行目	大学の	大学での
p. 168・10 行	(p. 27 の修正すべき箇所 に合わせ、他の箇所も同様に、計 22 箇所を修正した。)	
p. 168・11 行		
p. 168・14 行		
p. 186・下 14 行		
p. 186・下 13 行		
p. 186・下 10 行		
p. 187・11 行		
p. 196・下 8 行		

p. 196・下 6 行		
p. 198・14 行		
p. 198・15 行		
p. 198・18 行		
p. 199・3 行		
p. 199・5 行		
p. 199・8 行		
p. 199・下 9 行		
p. 199・下 6 行		
p. 202・6 行 目		
p. 213・1 行		
p. 218・下 10 行		
p. 226・1 行		
p. 51・2 行目	考えのもとにし	考えのもとにし
p. 227・17 行 目	重視しなくてはならない。	「何を」に当たる語句として、「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化という視点を」を加筆した。
p. 228・15 行 目	上述したような	上述したように
p. 229・下 7 行目	学生が日本語学習を	学生が日本語学習に

博士論文概要書	(本冊と連動する 3箇所を修正した。)	
p.2 ・ 下 10-11行	教育課程	教育過程
p.3 ・ 下 10 行	大学の	大学での
p.8 ・ 下 11 行		

日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト